

令和4年度第3回高知県産業振興計画フォローアップ委員会農業部会 議事概要

日時：令和5年2月6日（月） 13：30～15：30

場所：サンライズホテル 2階 向陽

出席：委員10名中、10名が出席（代理出席含む）

議事：（1）第4期産業振興計画 ver.3＜農業分野＞の取り組み状況等について

- ・農業分野の令和4年度の進捗状況及び令和5年度の強化のポイント
- ・原油・原材料高騰による経済影響対策について
- ・I o Pプロジェクトの推進
- ・データ駆動型農業による営農支援の強化
- ・大規模露地園芸の推進
- ・有機農業の推進
- ・スマート技術の実証・普及の拡大
- ・国産粗飼料（稲WC S）の生産拡大
- ・集落営農組織の拡大
- ・「園芸王国高知」を支える市場流通のさらなる発展
- ・R5年度輸出のさらなる対策・取組強化
- ・新規就農者確保に向けた取り組み
- ・農福連携の推進
- ・担い手への農地の確保と農地集積の加速化
- ・優良農地の持続的な活用

議事（1）について、県から説明し、意見交換を行った。（主な意見は下記のとおり）

議事については、すべて了承された。

※意見交換概要（以下、意見交換部分は常体で記載）

（1）第4期産業振興計画 ver. 3＜農業分野＞の取り組み状況等について

（久岡部会長）

- ・農業産出額が目標額に達していないのは、コロナ禍のみが要因ではない。
- ・所得の面で農家の生産意欲の減退について危惧している。
- ・離農した方の中古ハウスを有効活用する取組や生産力の拡大について聞きたい。

（杉村農業振興部長）

- ・農業産出額は、生産コストまで反映できていない。
- ・生産コストをかけずに、適正なコストで生産量を増やし、売り上げを伸ばし、所得を増やしていく必要がある。

- ・そのために、令和5年度はデータ駆動型農業の推進や中古ハウスの活用など、前向きな施策を考えている。

(藤田部会員)

- ・東京から見た高知は、園芸品の大事な供給県である。
- ・コロナ禍もあり消費の仕方が変わってきている。
- ・家族構成に合わせたロットを求めている。
- ・また、家庭での消費は、調理から冷凍食品等の加工食品の活用にニーズが移ってきている。
- ・全品目に消費者のニーズに合わせた商品作りが必要。
- ・商品をいかに消費者に届けていくか販売市場としての大事な役割だと思う。
- ・産地の皆さんと一緒に考えていきたい。

(森下部会員)

- ・カット野菜について、コロナの前後で販売数に変動はないが、節分の恵方巻きに使用するきゅうりのカットは、前年比で130%アップした。
- ・カットを依頼する量販店が増えたという印象。
- ・発注を受ければ、出荷義務があるので、きゅうりを確保して納品する必要がある。
- ・発注を受ける前から生産者と交渉することでWin-Winの関係が築けると思う。

(石塚部会員)

- ・2024年問題、露地栽培の技術的な今後の対応、稲WC Sの機械導入の協力体制・普及の動きについて聞きたい。

(松岡農産物マーケティング戦略課長)

- ・2024年問題について、輸送会社2社に聞き取りを行い、園芸品は従来どおりで対応できるとの回答。
- ・しかし、輸送代はアップすると思われるので、JAと輸送会社が話し合い、農家にあまり影響がないように調整をしていくと考えられる。

(千光土農業イノベーション推進課長)

- ・露地園芸は四万十町の加工用いも、南国市のたまねぎ等が産地として機能し始めている。
- ・ポイントとなるのは、大規模露地栽培に対応した機械の技術の開発である。
- ・機械メーカーと一緒に技術開発、実証していくことで、大規模露地栽培の拡大につなげていく。

(谷本畜産振興課長)

- ・ 稲WSCの生産を開始した際には、実証に機械メーカーの協力を得ていた。
- ・ その後、機械メーカーから機械をレンタルし、地域地域で生産を続けていただき、平成19年度の0.7ヘクタールから、現在283ヘクタールまで生産面積が拡大している。
- ・ 今後、収穫機械を導入する際に、県の補助金を活用して導入いただけるよう支援していく。

(久岡部会長)

- ・ 就農相談の内容を教えてください。

(武井農業担い手支援課長)

- ・ 多くは、自営就農したいという相談。
- ・ 年齢層としては、40代が増加し、30代が減少している。
- ・ 20～30代では、転職で就農したという相談。
- ・ 40代は、起業し、自営就農したいという相談。

(久岡部会長)

- ・ 親元就農される方の相談内容はどのようなものか。

(武井農業担い手支援課長)

- ・ 親とは異なる品目の栽培について希望されたり、農業担い手育成センターでの研修を希望される方もいる。

(久岡部会長)

- ・ 有機農業の露地栽培について、どのように栽培していくのか。
- ・ どのように流通させるのか。

(青木環境農業推進課長)

- ・ 有機栽培で一番多いのはゆず、次にお米、露地野菜ではショウガ、青ネギが栽培されている。
- ・ 県内は、有機農業に向けた気象条件ではないが、現在有機農業で栽培されている既存の作物を伸ばす。
- ・ 適地適作を進める。
- ・ 価格は、有機農業でかかるコストを計算し、相手方と交渉して販売されているが、だいたい一般価格の3割高での取引。
- ・ 農家の希望や意欲に沿って進めて行きたい。

(田畑農産物マーケティング戦略課課長補佐)

- ・有機農業で販売されている方や売り場の状況をヒアリングすると、売り場はあるが商品が揃わなかったり、品目が一部に集中すると聞く。
- ・市場に協力いただきながら、ニーズの把握に努めたい。

(久岡部会長)

- ・有機農業の推進の目標について、ハードルが高いのではないか。

(青木環境農業推進課長)

- ・国の目標面積に応じて、県内の目標を設定している。
- ・高い目標だが、脱炭素やSDGsの実現に向けて、改めて取り組むスタートアップの年にしていきたい。

(石塚部会員)

- ・担い手への農地の確保と農地集積について、法人・企業体と家族経営は分けて考えないといけない。
- ・企業からの問い合わせはあるのか。

(千光土農業イノベーション推進課長)

- ・企業参入の問い合わせは、毎年10件程度。
- ・問い合わせいただいても土地がないので、保留になっている状況。
- ・現在30~40社が保留中で、それをリスト化しており、土地が出てきた際に、各社に情報共有している。

(三谷部会員)

- ・農福連携推進アドバイザーは、どのような方が役割を担っているのか。

(青木環境農業推進課長)

- ・安芸のきずなファームでB型事業所を運営されている方。
- ・それぞれの地域で農福連携に取り組みたいという時に、会議に参加してもらい、ご自身の事例を話してアドバイスしてもらおうようにしている。

(三谷部会員)

- ・障害者の年齢構成は。

(青木環境農業推進課長)

- 10代～70代、多いのは40～60代。

(宮地部会員)

- 先日、農大でドローンやアシストスーツの勉強会をやっていた。
- また、是非勉強会を実施してほしい。

(青木環境農業推進課長)

- 来年度もニーズの高い機器の実装会を実施したい。